掲載日：2019年03月12日，面名：特集１，記事ID:KIJ20190312_A0004000101E34001

(C) 沖縄タイムス社

学ぶ楽しさ伝える情熱

第56回沖縄タイムス教育賞に、学校現場や地域で優れた研究、実践活動を続ける２氏１団体が選ばれた。受賞者の活動と抱負を紹介する。贈呈式・祝賀会は18日午後６時半から、那覇市の沖縄かりゆしアーバンリゾート・ナハで。会費は一般５千円、高校生３千円、中学生以下は無料。問い合わせは沖縄タイムス社読者局文化事業本部、電話098（860）3588。

世代間交流 地域の絆

■社会教育　久米島町西銘老人クラブ

「子どもたちと遊ぶと、年齢を忘れる」と久米島町西銘の西銘老人クラブ会長の盛吉秀雄さん(85)。同クラブは、2006年から町立大岳小学校の子たちと昔遊びで交流を始めた。08年からは「放課後子ども教室」に。以来11年間、少子高齢化が進む島で、学校を起点として地域の絆を結んでいる。

教室の昔遊びでは、主に竹トンボや紙鉄砲、水鉄砲、こま、アダンの葉の風車などを一緒に作り、遊び方を手ほどき。夏と冬の長期の休みを除き、月1回ペースで通算100回近く、参加した子は延べ250人を超える。老人クラブは現在、会員36人で最高90歳、平均83歳。豊かな人生経験が、わいわいと皆でおもちゃを手作りし、遊び、笑い合う体験の場を支えている。

おもちゃの素材は、山の竹、海べりのアダンといった島の自然の中で、会員が手分けして集める。盛吉さんは「子どもたちが喜ぶ顔を思い浮かべて準備していると、生きがいと自信になる」と振り返る。町教育委員会が毎年開く「夏休みものづくり体験」では、西銘老人クラブのコーナーに人だかりができる。お年寄りも子どもたちも笑顔になった。



子どもたちと畑仕事に取り組み、ジャガイモの収穫を楽しむ西銘老人クラブの会員ら＝久米島町

近年復活した後の主催を引き受けた。

交流の場づくりは、校区や島の人向けにとどまらない。福島県の原発被災地から訪れる子にも昔遊びを伝え、親睦に一役買う。大岳小校長の太田佳世子さんは「労を惜しまず子どもたちの成長を願ってくれている。おおらかで人情味あふれる地域の象徴」と感謝する。盛吉会長は「皆が喜んで活動してくれたおかげ」と、穏やかにほほ笑んだ。

（比嘉正明通信員）

実践的研究の継続に敬意

講評　比嘉敏幸選考委員長

今年は10件の応募があった。応募数は昨年より減ったが、小中高校やPTA、教育委員会などから推薦されただけあって、いずれも素晴らしい教育者・団体ばかりだった。その中でも特に優れた実践的研究を継続してきた2個人1団体が「沖縄タイムス教育賞」に選ばれた。受賞者には心から敬意を表したい。

今回、社会教育部門で久米島町の西銘老人クラブが受賞した。平均年齢80歳以上の人生経験豊かな高齢者と子どもたちが日常的に接することで、知識や地域の伝統が脈々と引き継がれている姿は、他の地域の模範にもなるものと高い評価を受けた。

老人クラブの受賞は教育賞の半世紀余の歴史の中でも初めてであり、地域の高齢者と子どもたちの触れ合いが減少している昨今の社会の中では注目される取り組みだ。たくさんの示唆を与えてくれるものだと思う。

学校教育部門の個人で受賞した仲田丘校長は、多彩なアイデアとリーダーシップを発揮し、学校を活性化させる取り組みで高い評価を得た。校長の学校経営の目標が職員や生徒一人一人に浸透しており、子どもたちに語り掛ける校長講話も胸を打つものがあった。

野里純図書館司書は、生徒の読書活動の推進を図るため、創意工夫している点が評価された。独創的なアイデアを生かし、読書をしたくなる図書館づくりに取り組んでいる姿は、後に続く人材が出てくることを期待させるものだった。

各受賞者の教育に対する熱意をたたえたい。

受賞を逃した中にも優れた指導・活動がうかがえる実践が数多くあった。ただ、指導者と子どものかかわり、子どもの成長に与える影響などが資料から十分に読み取れない例が見受けられた。素晴らしい実践だろうと推測されるものの「資料が不足していて十分に評価できない」と指摘されるケースもあり、第三者が客観的に評価しえるような資料の充実を図り、あらためて応募をしていただきたい。

事務局に対しては選考要項をより分かりやすくするべきだとの指摘もあった。教育現場で熱心な取り組みを続けている個人・団体に光を当て、応募を促す取り組みの強化を求める声も寄せられた。貴重な意見を基に次年度以降の選考に生かしたい。

残念なのは島尻、宮古、八重山地区からの応募がなかったことだ。来年度は県内全地域から多数の応募があるよう期待したい。

（沖縄タイムス社取締役）

「動きある学校」実行

■学校教育　仲田丘さん（60）

宜野湾市立嘉数中学校校長

校長として在籍した5年間で、自らが掲げる「美しいものを美しいと感じ、そうでないものを不快に感じ、美しいものへ変えていく、動きのある学校へ」との学校経営方針を愚直に実行した。保護者からは、学校環境が「劇的に変化した」との声が届く。

赴任後、まず始めたのは校内掃除。「汚い所から、悪ははびこる」との考えからだ。廊下の隅に放置された備品やごみ袋など、いらないものは処分、必要なものを整理した。短期間で結果が出る掃除は成果も分かりやすく良いという。

職員と学校の問題点、課題を探った。進学や学習方法に対する情報不足、学習不振、同じ境遇の生徒の集団化…。洗い出した内容一つ一つに対策を練った。「『学校を変えた』『学校は変われるんだ』とみんなで最後に言おう」。その一心だった。

「目標にたどり着くためには学びが必要」と生徒の〝学び直し〟が重要と捉え、小学1、2年のドリルを与えるなど「逃げた場所」からの学習にも取り組む。相談室に個別学習ブースを設置し、学びやすい環境もつくった。

琉球大学の支援チームと連携し、発達障害のある生徒に対しての丁寧な配慮・支援にも力を入れる。同時に、礼節や規律はしっかりと教え、学校は「学ぶ場所でありルールがある」ことを徹底した。

月1度、全体で30分ほどの校長講話も実施。保護者も参加でき、校長の考え方を生徒、職員と共有することで「同じ方向に向かうことができる」という。曲に合わせた写真スライドで1カ月を振り返り、日々の積み重ねの大切さも学ぶ。

情報にアンテナを張ることを心掛ける。感銘を受けた本の著者らには、県外でも直接会いに出向いた。3月で定年退職を迎えるが「私はたくさんのものをもらってきた。それを伝えていくことは使命だと思っている」と情熱を絶やさず、これからも教育に向き合う。

なかだ・つかさ　1958年生まれ。宜野座村出身。兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程修了。82年に石川中で採用。2010～13年、うるま市教育委員会で指導課長、部長を歴任。14年から現職。16年から県中学校文化連盟会長。



リーダーシップを発揮し学校活性化に取り組んだ嘉数中学校校長の仲田丘さん＝宜野湾市我如古の同校

本との出合いを支援

■学校教育　野里純さん（44）

那覇市立那覇中学校図書館司書

学校図書館司書になって20年。「図書館に足を運んでもらうこと」を重視し、児童生徒や教員のためになる本をそろえ、新刊情報などの発信に力を入れる。本の分類、本棚や読書スペースなどのレイアウトも工夫し、「利用しやすい空間」の図書館づくりを追及する。

那覇中学校図書館の蔵書は約1万6千冊。毎月100冊弱の新しい本を購入する。来館者の目に付くように図書館外の壁に新刊本の表紙コピーを張り、2週間に1回ほど発行する図書館便りで新刊情報や図書館活用法をPR。教員向け図書館便りも作成する。学校行事やひな祭り、こいのぼりなど季節に合わせた掲示や特集コーナーも約2週間ごとに変えている。

実家に本が多く、自身もたくさん所有していたという、「本を読むよりも、お世話をするのが好き」と司書を目指した。

那覇市学校司書研究会では図書館業務マニュアルの改訂作業を主導したほか、実践事例や研修会で学んだノウハウを後輩司書らにも提供。沖縄国際大学で非常勤教員として本の分類法の実践を教える。

那覇中図書館のレイアウトも利用者の動線を考えつつ、「日本十進分類法」に沿って分類し、本棚や机などを配置する。分類法に合わせることで本を探しやすくなるほか、「関連する分野や知識の発展、体系を感じてもらい、知らない分野の本とも出合ってほしい」と期待を込める。

調べ物コーナーや半個室のような学習コーナーも設置。私語厳禁ではないため、放課後に和気あいあいとグループ作業する生徒の姿も。漫画やスポーツ雑誌を置くくつろぎスペースでは、昼休みなどは床に座っての読書も認め、男子生徒の居場所にもなっている。

今後の課題には「授業での図書館利用」を挙げ、授業の組み立て方の提案や教員との連携強化を目指す。「図書館という空間に本があり、使う人がいて成り立つ。司書として足を運ばせる、使ってもらう工夫を続けていきたい」

のざと・じゅん　1974年、浦添市生まれ。沖縄国際大学卒業。99年に那覇市教育委員会採用、石田中や神原中、金城小などで勤務。2014年から沖国大非常勤教員も務める。



図書館便りや、入り口付近の季節ごとの掲示物などにも力を入れる野里純さん＝那覇市松山、那覇中学校